

日常場面解釈テストの作成と妥当性の検討

— 大学生の愛着スタイルと絵画刺激への反応との関連から —

○左部まりな¹・井米澤好史²

(¹徳島大学大学院総合科学教育部・²和歌山大学教育学部)

問題と目的

Bowlby は愛着の問題は重要な課題であり、愛着スタイルが後の対人関係に様々な影響を及ぼすことを指摘している。米澤 (2015) は学校教育現場での子どもの問題行動の裏にこうした愛着の問題がある可能性や、愛着障害の診断の難しさを指摘している。成人の愛着スタイルの判定が質問紙等で行われている一方、幼児は、養育者の評定による判定が一般的である。しかしながら養育者の中には愛着に障害を抱えている者もあり、いつでも養育者が自分の養育態度や子どもとの関係を客観的に見直すことができるとは限らない。そのため、本研究では、幼児が自ら取り組むことのできる質問紙の作成を提案する。今回は事前調査として、成人・青年を対象とした研究を行った。

方法

【調査協力者】 A 大学の大学生 115 名 (平均年齢 19.97 歳, 男性 68 名・女性 47 名)

【質問紙の作成】 A 大学の学生 15 名に対して事前アンケートを行い、「家庭以外の場所 (学校、職場、友人間など) で日常的に見聞きし経験する場面」のうち、「①抑圧的」「②拒否的」「③支持的」「④受容的」の 4 つのそれぞれの項目について自由回答を求めた。この回答をもとに共同発表者である指導教員と相談し、質問紙を作成した。

【質問紙の構成】

- (1) フェイスシート：年齢、性別、家族構成
- (2) イラスト質問紙 (今回作成)：二つの日常的な場面を表したイラストに説明文を添え、それぞれ以下の項目について 4 件法で質問した。「場面」：①ポジティブ②ネガティブ、「人物」：①抑圧②拒否③支持④受容、それぞれ 4 項目、計 24 項目。
- (3) “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度 (以下 ECR-GO)：①親密性の回避②見捨てられ不安の二つの下位尺度を持つ。

結果と考察

ECR-GO の各下位尺度とイラスト質問紙の下位尺度との相関分析を行った。結果を Table1 に示す。表のとおり、“見捨てられ不安”は、“ネガティブ”、“抑圧”、“拒否”とそれぞれ有意な相関

が見られたが、“親密性の回避”においてはいずれの尺度とも有意な相関はみられなかった。さらに、“見捨てられ不安”、“親密性の回避”について中央値で高群と低群に分け、イラスト質問紙の各下位尺度との t 検定を行った。その結果、“見捨てられ不安”では“ネガティブ”、“抑圧”、“拒否”においてそれぞれ 1%水準で有意差が見られたが、“親密性の回避”ではいずれの尺度においても有意な差は見られなかった。

Table1. ECR-GO各下位尺度とイラスト質問紙各下位尺度との相関係数

	ネガティブ	ポジティブ	抑圧	拒否	支持	受容
見捨てられ不安	.302**	-.102	.301*	.273**	-.133	-.168
親密性の回避	-.072	.152	-.033	-.065	.048	.007

*:p<.05

**p<.01

したがって、“ネガティブ”、“抑圧”、“拒否”の項目においては“見捨てられ不安”の測定について妥当であると考えられる。“見捨てられ不安”の higher は自分へのネガティブな評価が他者にも投影され、それがイラスト刺激の人物へのネガティブな反応にも反映されていると推測できた。対して“親密性の回避”はイラストに描かれた場面の解釈には影響しにくいことがわかったが、これは、“親密性の回避”が高い者は描かれた場面や人物に対して興味がなく、俯瞰的に見ているからではないかと考える。内田・古家・小山 (2012) の TAT による先行研究では、“親密性の回避”のみが高い群である“回避型”は TAT への反応量が少なく、刺激から距離を取り、感情表現に乏しいということが指摘されている。そのため、選択回答式のイラスト質問紙では同群の微妙なニュアンスの感情を読み取ることができなかったと考える。

本研究から、児童の言語的スキルに依存しない測定の方法や、感情表現の乏しい児童の情動をいかに読み取るか、などの課題が考えられた。それらを踏まえ、今後の研究では小学生を対象に、どのような子どもが対人関係の中でどのように感じやすく、どのような行動を起こしてしまひやすいのか、あるいは相手の意図をどのように解釈してしまひやすいのか、について検討していきたい。